

# I

## 道南の アイヌの人びとの生活相

— 菅江真澄の民俗図絵より



# 菅江真澄の民俗図絵

## 【作品解説】

三河の人菅江真澄（1754？～1829）は天明3年（1783）郷里を旅立って以来、再び帰ることなく東北・北海道を巡り歩き、秋田の地で最期を迎えた。この間、幾多の日記・地誌・随筆などを残し、土地の人々の生活文化を記録した。しかも文章だけでなく、たくさんの風景や民俗などのスケッチを書き残してくれた。その挿絵は澁澤敬三が提唱した「絵引」の手法を先取りするかのように、絵中の事物に番号を振り、その呼称を記すということまでしていた（拙稿『「絵引」をする菅江真澄』『年報人類文化研究のための非文字資料の体系化』第4号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年3月）。文と絵を組み合わせて読み解くことによって、いっそう失われた過去の生活文化の理解を深めていくことが可能になると思われる。

真澄が津軽半島端の宇鉄から松前城下（福山）に渡海したのは、天明8年（1788）7月14日のことであった。松前藩の旅人統制のきびしさから入国が拒否される寸前であったが、藩医吉田一元の計らいで滞在が許された。松前文子や下国季豊・佐々木一貫らの和歌グループに囲まれて4年余りを過ごした。この間に真澄は2度の蝦夷地の旅を経験している。

1回目は寛政元年（1789）の4月20日、西蝦夷地の霊場太田山をめざして出立した旅である。この時の遊覧記が『蝦夷喧辞辯』（『えみしのさえき』）で、時節柄西海岸の鱈漁に生きる人々の生の声が拾われている。この旅から戻った真澄は同年箱館・恵山方面を歩き、『ひろめかり』を書いている。とくに昆布刈りの技術にこだわりをみせ、詳細な挿絵を残した。

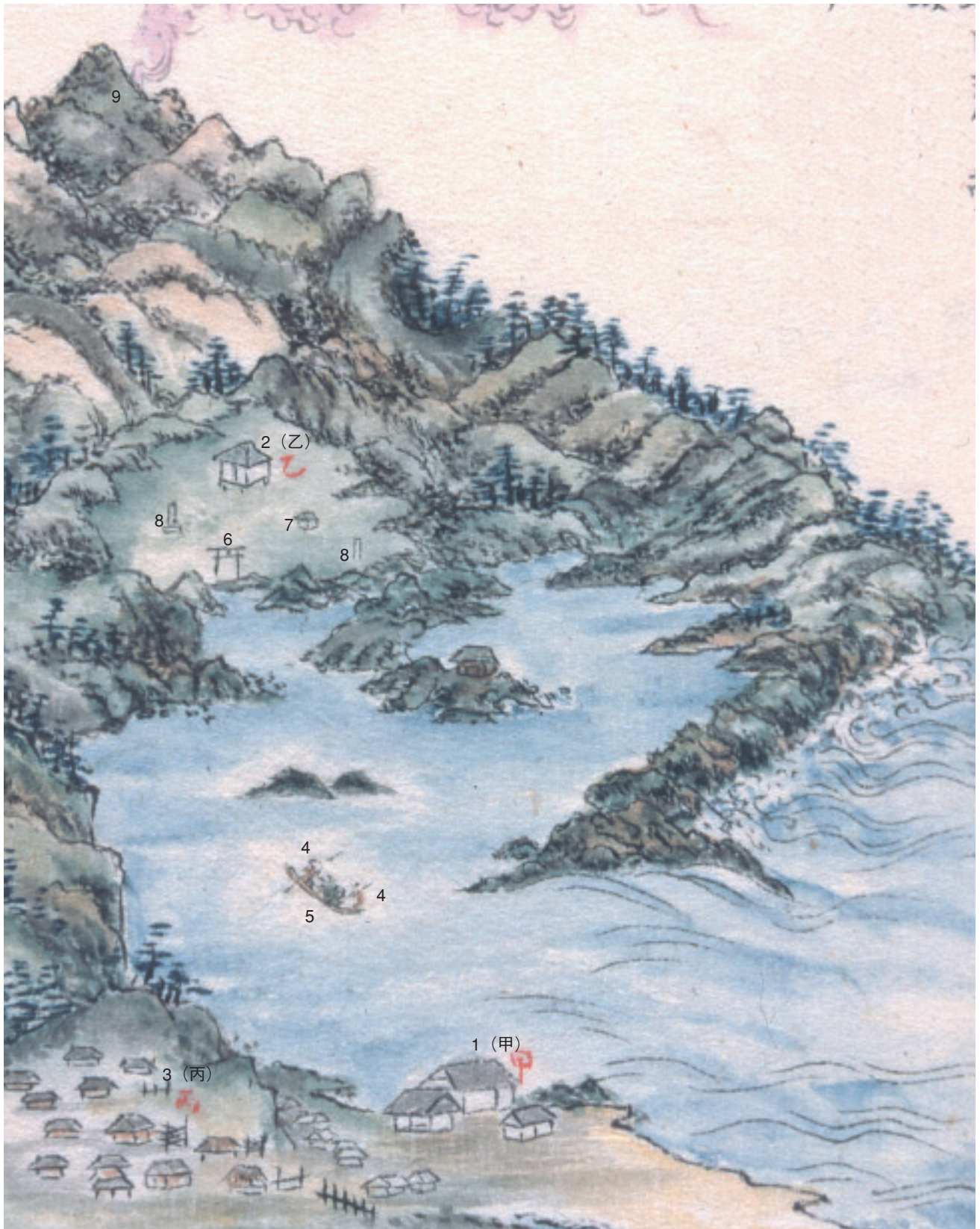
2回目は寛政4年5月9日、東蝦夷地の臼（有珠）山をめざして松前城下を発った旅である。従来は寛

政3年の旅と考えられてきたが、寛政4年が正しい（拙稿『『蝦夷廻天布利』の成立年をめぐる』『真澄学』第2号、東北芸術工科大学東北文化研究センター、2005年）。真澄は早くから東蝦夷地への旅を念願していたが、寛政元年5月にクナシリ・メナシのアイヌの蜂起という大事件が発生したことがおそらく影響して、それがかなわず、ようやく実現できたものであった。この2回目の旅では、1回目よりもアイヌの人々と直に触れ合う機会が多く、噴火湾（内浦湾）地域のアイヌの生活文化を挿絵とともに詳しく残してくれた。『蝦夷廻天布利』（『えぞのてぶり続』）がその日記である。この旅の後、松前滞在に区切りをつけ、寛政4年（1792）10月7日松前城下に別れを告げ下北に渡っている。

本試案本では、『蝦夷喧辞辯』『蝦夷廻天布利』の2作品のなかから、おもにアイヌの生活文化に関わる挿絵を選び、絵引を試みた。解説にあたっては真澄の本文を常に参照したが、引用はすべて『菅江真澄全集』全12巻・別巻1（未来社、1971～1981年）により、たとえば第1巻p123は①123、第1巻図版123番は図版①123と略記した。また、図版は秋田県立博物館所蔵模写本（ただし『百白之図』のみは大館市立中央図書館所蔵自筆本）を使用し、自筆本との比較の便をはかって『菅江真澄全集』掲載図版および『菅江真澄民俗図絵』上・中・下（岩崎美術社、1989年）の該当箇所がわかるように示した。図版掲載を許可された両館には感謝申しあげたい。

なお、アイヌ語表記であるが、菅江真澄の記述におおむね従っている。ただし、その使用が正確であるとは限らないので吟味が必要であるが、ここでは果たせていない。

# 1 コタンの遠景——ウスの濁・ウスの岳



- |                    |                 |
|--------------------|-----------------|
| 1 運上屋 (甲)          | 6 鳥居            |
| 2 善光寺仏を祀る堂 (乙)     | 7 小祠            |
| 3 蝦夷の舎 (丙、アイヌのコタン) | 8 いしぶみ (石碑)     |
| 4 小舟を漕ぐへカチ (前後2人)  | 9 ウスの岳 (臼山・有珠山) |
| 5 小舟に乗る2人 (1人は真澄か) |                 |

図版 『蝦夷晒天布利』(秋田県立博物館所蔵模写本)

自筆本 『菅江真澄民俗図絵』上巻p169(カラー) / 『菅江真澄全集』第2巻口絵写真168番(モノクロ)

菅江真澄は寛政4年（1792）6月10日、泊っていたアブタの運上屋を出発し「御嶽のぼり」にでかけた。運上屋のあるじが、案内として2人のアイヌをつけてくれた。丘ひとつを越え、ウス（臼）のコタンにつき、運上屋（1・甲）で少し休んだ。真澄は別な箇所、運上屋について、「うなのものとりをさむる、さぶらひやうの屋形をたてて」（『蝦夷廻天布利』②31）、「嶋の守よりおかせ給ふ、さもらひのあるに」（②102）と説明している。当時、松前藩主や有力家臣はアイヌと交易する商場（場所）を持ち、それを商人に運上金を出させ請け負わせる形態をとっていた。そうした家臣のことを普通、商場知行主と呼んでいる。

真澄が「さもらひ」と述べているのは、商場に設営された交易の役所というニュアンスで理解したからであろう。運上屋に真澄が泊っているように、運上屋は蝦夷地通行人の宿泊施設の役割も果たした。寛政4年頃、アブタは商場知行主酒井弥六（伊兵衛）、請負人能登屋吉兵衛、ウスは商場知行主新井田浅治郎（浅次郎、内蔵之丞）、請負人橋本孫兵衛であった（河野常吉「場所請負人及運上金」、ただし史料によって多少人名に異同あり、『松前町史』史料編③p441～442、松前町、1979年）。真澄が描く運上屋は主建物にやや大きめの建物2つが付属し、その近くに、アイヌのコタン（3・丙）とは区別される、小屋のようなものが6棟ぐらい見えるが、出稼ぎあるいは越年和人の居家であろうか。また、運上屋とアイヌコタンとが相接して建っていることも特徴である。これは主要なコタンの近くに交易場が設けられたことに始まっているが、やがて運上屋の周辺にアイヌの人々が集住していくようになり、「自然コタン」から「強制コタン」への移行として論じられてきた。

ウスは入り江であるが、湖水めくところで、松島・象潟のような面影を感じたので、小舟をへカチ2人に漕がせて乗り出した。小舟はウスの運上屋から提供を受けたのだろう。図には潟の中を漕いでいく小舟が描かれている。小舟の前後に立ち、漕いで

いるのが案内のアイヌ2人（4）で、笠をかぶり座っている2人（5）はシヤモ（和人）で、うち1人が真澄自身かと思われる。もう1人のシヤモが乗船していたことになるが、何も記していない。他の図にも2人描かれているのがあり、同行の旅人か。

やがて、舟を鳥居（6）が立っているところの小嶋（小島）に寄せて降りた。小坂を登っていくと、二間ばかりの（2・乙）の堂があった。その戸を押し開けてみると、円空の作る仏二軀があった。1つは石臼の上に据えてあった。竹笈のなかにこがねの光る仏が入ったのが見えたが、国めぐりの修行者がここで死んだので、そのまま納めたものであるという。また、すすけた紫銅の阿弥陀仏があり、津軽今別の本覚寺僧沙門貞伝作とあった。鰯口の鐸には、<sup>(1628)</sup>「寛永五年五月 下国宮内慶季」と彫ってあるのも見えた。堂の傍ら、木賊<sup>とくき</sup>が茂るなかに小祠（7）があり、このなかにも円空仏が3軀あった。図に石碑のようなものが2つ（8）描かれているが、どちらであろうか。碑には「善光寺三尊如来 開眼 善光寺十三世 定蓮社禅誉上人智栄和尚 <sup>(1726)</sup>享保十一丙午年正月五日 願主 上総国市原郡光明寺八世 天蓮社真誉禎阿和尚」と刻まれていた（②132）。図では場所が分からないが、小さな岩穴があり、潮の満ち干でしたたり落ちる音が高く響いている。夜籠りの人に、遠耳に大鐘が遠く響くように聞えたり、あるいは金鼓の音かと迷わせるのは、このことかと思った。

再び堂の中に入って休むと、薙が清らしく敷かれており、それは夜籠りする人たちのためのものであった。いつも、月のなかばから末にかけて念仏を唱えて円居し、大数珠を繰りめぐらす。また、年を越して住居するシヤモは春の彼岸にこの堂に集まり夜念仏を唱えるという。海士、山賤が語るには、月のはじめに臼のみたけの御仏が信濃国に飛行して行ってしまい、十六夜にこの浦に帰ってくるとのことであった。

善光寺（浄土宗）は江戸幕府が文化元年（1804）に類似の等澗院、厚岸の国泰寺とともに建立した蝦

夷三官寺の1つとして知られている。真澄が尋ねたのはその建立以前のことであり、円空仏や貞伝の阿弥陀仏など、善光寺の前史についての重要な記述となっている。『新羅之記録』（正保3年・1646成立）によると、「宇諏<sup>ウス</sup>の入海」は「日域」の松島の「佳境」に劣らない「佳景の地」で、「往古」には数百家の人間が住み、善光寺如来の旧跡があった。真澄も記していたことであるが、「時々称名の声鉦鼓の音を「夷」が聞くことがあり、奇異の思いをなす。藩祖松前慶広が慶長17年（1612）冬の夢の告げにより、翌18年5月1日、船に乗りそこに詣でて如来の御堂を建立した（『新北海道史』7、p52、新北海道史印刷出版共同企業体、1969）。これがウスの如来についての古い記録である。『福山秘府』所載の享保3年（1718）6月の「東在御堂社改之控」によると、東蝦夷地宇須に「古来」よりあった「如来堂」と、神体（本尊）が円空作の「観音堂」の2つがあった（『新撰北海道史』5、p120、北海道庁、1936）。真澄が堂（2）と言っているのが「如来堂」、「小祠」（7）と言っているのが「観音堂」に当たるか。

如来堂のあった場所と現在の善光寺がある場所とは、真澄の図を見るかぎりでは異なっている。現在の善光寺は真澄の図ではコタン・運上屋の左下あた

りに位置するだろうか。前期幕領期の文化3年（1806）調べの『宇寿場所様子大概書』に「地藏堂壺ヶ所、右は以前より阿弥陀仏安置有之候処、当地は地藏安置致置、右阿弥陀仏は善光寺本尊に相成候」と記されており、善光寺の本尊となった阿弥陀仏はもともと地藏堂の場所にあったことになる。地藏堂は現存しており（『新北海道史』7、p525）、真澄の図にある堂（如来堂）の場所とおよそ合致している。真澄が円空仏などを見た堂は善光寺建立後、地藏堂となった場所であると推定しておきたい。真澄の時代にはウスの瀉は松島湾の風情があったが、現在は湾内に漁港や堤防があり、面影を感じさせるものの、だいぶ景観が変わっている。

真澄は堂をみた後、(9)のウスの岳（臼山・有珠山）に登っている。図では噴煙をたなびかせているが、有珠山はたびたび噴火を繰り返し、近世には寛文3年（1663）、明和6年（1769）、文政5年（1822）、嘉永6年（1853）に噴火している。最近では2000年の西麓噴火が記憶に新しい。富士山に登るような気分で頂上をめざして行くと、噴煙（水蒸気）を出す火井（燃え穴）が下方に見える岩山のところに来たが、それに落ちると身を滅ぼすと案内のアイヌにたしなめられ、岩山に登るのを諦めている。

## 2 コタンのすがた——チセと付属施設



図版 『蝦夷廻天布利』(秋田県立博物館所蔵模写本)

自筆本 『菅江真澄民俗図絵』上巻p145 (カラー) / 『菅江真澄全集』第2巻口絵写真156番 (カラー・モノクロ)

- |                      |                        |                   |
|----------------------|------------------------|-------------------|
| 1 チセ                 | ⑥ 籬堆・幣場 (乙、ツセキ、ヌサ)     | ⑪ 田柵・檻 (丁、セツツ・セツ) |
| ② 股ぶりの木棹 (甲、物干し)     | 7 ヒグマ (熊) の頭骨          | 12 石を置く           |
| 3 昆布                 | 8 イナウ                  | 13 ヒグマ (熊) の子     |
| 4 木の皮 (アツシ・アットウシの繊維) | 9 タクサ                  | 14 床立 (セツカ)       |
| 5 曲げ物の容器 (ニヤトス・カモカモ) | 10 楼倉・多加久良・高庫 (丙、プ・プウ) |                   |

寛政4年（1792）6月3日、真澄はモノダキからアイヌの船に乗ってヤムヲコシナキ（山越内）まで行き、そこから歩き、ハシノシベツの川を渡ってきてアイヌの宿に休んだ（『蝦夷廻天布利』）。その家では太い虎杖の柵をつくり、シヤモがシマフクロウと呼ぶ鳥の神チカフカムキ（チカフカムイ）を飼養していた。8月、9月頃、鳥であれ獣であれ「さきほふり」（切り裂き）、1年に1度のアイヌの国の「大祀饗飾」を行なう。これをアイヌはヨマンといい、シヤモ言葉では送るの意味であると、真澄は記している（②114）。本図はこの場面のところに置かれているが、柵の中にはシマフクロウではなくチラマンデ（羆、ヒグマ）が飼われているなど、必ずしも対応していない。この場面よりは、『えぞのてぶり続』6月15日のユウラツフの川べりのアイヌのチセでの観察のほうかふさわしいようにも思われるが、ここでは立ち入らない。特定の場所だけを描いたものではないのかもしれない。

この絵はアイヌの住居であるチセ（1）を中心にその付属施設を詳しく描いており、当時のアイヌコタンの生活空間をイメージさせてくれる。絵に記された説明文には、「<sup>アキノコタン</sup>蝦夷舎村に<sup>ヲツフ</sup>木棹をよこたふ、<sup>ツセキ</sup>又甲に木葉さし生ひて<sup>チラマンデ</sup>軒端の林をなせり、乙籬堆にハ羆の霊を祭る、丙楼倉にハ貨財を蔵し、丁柵欄にハチラマンデを養ふ」とあり、絵の該当箇所甲乙丙丁と朱字で番号をつけて、説明文と対応させている。

まず、甲の物干しの木②である。これは元々そこに生えていた木ではなく、股ぶりになった柳やイタヤなどを伐ってきて立てると、根が付き葉が出てくるとの説明が他の箇所でもなされているので（②147）、そのようなものと理解しておきたい。物干し木の木棹（ヲツフ）に干している物は、右から昆布（3）、アツシ（アットウシ、4）を織るために木皮を裂いたもの、そして別図にも出てくるニヤトス（カモカモ、弦つき曲げ物の容器、5）であろうか。このニヤトスには何が入っているか定かではないが、魚の油腸のようなものであろうか。

⑥（乙）は羆の霊をまつる籬堆であるというが、

ツセキというアイヌ語は現在のいくつかのアイヌ語辞典では確認できない。真澄の聞き違いかもしれない。クマの頭骨（7）やイナウ（8）を立ち並べた祭壇はふつうヌサ（幣場）と呼ばれている。真澄はこの図のほかにも羆の頭を股ぶりの木に差し挟み、イナウを添えて神（カムイ）として祭っているところを描いた絵を残している（図版②85）。頭骨を置いた又木の下の方に笹の葉を何枚か結わえつけているのが見えるが、これはタクサ（タクサイナウ、9）であろう。羆が神の国に帰るときの脚である（満岡伸一『アイヌの足跡』）、などと説明されている。熊送り（イオマンテ、霊送り儀礼）はアイヌ文化の中核に位置するものと位置づけられており、それを論じた研究は多い。

（10・丙）は2カ所につけられ、家財を保管する「楼倉」と図中では説明されている。別な箇所ではシヤモ言葉で「多加久良」（高倉・高庫、高床式倉庫）、アイヌ語では「フウ」（ブ）と呼ぶとしている。真澄はアブタにサカナという「家財珍宝」持ちがいて、その未亡人がその財宝を高倉に秘め隠して誰にも見せないという話を書きとめている（『蝦夷廻天布利』②139）。このようにブは家財庫の機能を持ったといえるが、粟・稗、たら・にしん・さけの干物など食料を保管しておく場所であった（『蝦夷喧辞辯』②32）。高倉には鼠などの食害や湿気を防ぐ目的があった。この図には描かれないが、真澄が後年秋田藩の山里で「雁木階子」を見ているが（図版④640）、これはアイヌのニキガリと同じものだと着目していた。ニキガリ（ニカラ）は高倉に登るための、1本の丸太に段刻みを入れて登れるようにしたものである（真澄が秋田で見たものは丸太ではなく方柱を使用）。

（11・丁）は羆を飼養する「柵欄」（檻）である。真澄がアブタで見た観察によれば、「細き黒木の柱を三本づつ四の隅に立て、それに横木あまたを組みあげて軒にひとしう高き柵」であった（『蝦夷廻天布利』②130～131）。この図でも3本ずつ四隅に立てられているのがわかる。上部に、石（12）を置い

ているのは羆の子(13)が逃げないように上から重しを加えるのである。檻はアイヌ語では「セツツ」(セツ、床机の意)と呼ぶ。さらに、真澄はアブタの記事で、羆は「春の子」で、小さいころからメノコ(婦人)の乳で養い育てるので、秋の末冬に「送る」際、その羆を殺し、肉を食べるとき、メノコたちは声をあげて涙ながす、と記している。なお、檻には羆のほか、前述のシマフクロウ、さらには矢羽を取るための鷺が飼われる例があった。

真澄は番号を振っていないが、画面に大きく描かれる2棟のアイヌの家屋(1)はチセという。夏の暑い季節の観察によるのだろうが、入口や窓が開け放ちになっている。建築史の小林孝二氏は、この家屋は寄棟、草葺屋根、段葺で、壁は簾状、柱が外部に露出、軒の出は比較的大きい、という形態的特徴をあげている。屋内には次の絵にも出てくるセツカ(榻・床立、14)が見える。セツカとはセツ(高

床)・カ(上)の意である(児島恭子)。この絵からわかるわけではないが、チセの屋根部分は従来ケトゥンニ構造(三脚サス)であるといわれてきたのに対して、氏は二脚サスの並行サス組とみるべきではとの指摘をしている。

このようにアイヌの居住空間はチセを中心に、高倉、鳥獣の檻、物干し、祭壇(ヌサ)が付属していた。この図に描かれていないものでは、雑穀の糠や壊れた日用雑器を棄て、イナウを立てて物送りする糠捨て場があった。『凡国奇器』の類似の絵(図版⑨164)にはこの糠捨て場も観察され描かれている。近代の満岡伸一のコタン図と比べて、存在しないのは便所である。秦憶丸『蝦夷島奇観』などが描くコタン図なども同様の構成要素からなっているので、近世アイヌの生業と生活にふさわしい、平均的な居住構成がこの図に描かれているといえるだろう。

#### 【参考文献】

- 満岡伸一『アイヌの足跡』(白老民族文化伝承保存財団、1924年初版・1987年第8版増補)。小林孝二「アイヌ民族の住居(チセ)をめぐる視点—近世の絵画資料を中心として—」(『アイヌ文化と北海道の中世社会』、北海道出版企画センター、2006年)。  
 児島恭子『アイヌ民俗図資料の見方』(『非文字資料研究』16、2007年)。



### 3 チセの内部——セツカの上の女性



- ① 婦女（メノコ）
- 2 耳飾り・耳環（ミンカレ・ニンカリ）
- 3 首飾り小帯・咽玉輪（リクトンベ・レクトンベ）
- 4 入墨（口の周り）
- 5 入墨（手の甲）
- ⑥ 榻・高榻・床立（セツカ）

- 7 叉木（床を支える）
- 8 文織蓆（シタラヘ）
- 9 棍棒（シュト・シト・セトフ）
- 10 子ども用のセトフ
- 11 袋状の小魚の胃（キナボ＝マンボウの油を入れる）

図版 『蝦夷廻天布利』（秋田県立博物館所蔵模写本）

自筆本 『菅江真澄民俗図絵』上巻p151（カラー）／『菅江真澄全集』第2巻口絵写真159番（モノクロ）

この図には何も説明書きはないが、対応する本文によると、寛政4年（1792）6月4日、真澄がホロナイのアイヌの「栖家」に入り休憩したさいに観察したチセ内部の様子である（『蝦夷廻天布利』②118）。「ヤカタ」はアイヌ言葉では「良屋」のこと

で、「チセキ」は苫屋・丸屋をさすと後年注記しているが、有力者の立派な家屋とみたのであろう。ただ、真澄はチセを粗末げな苫屋・丸屋という意味ばかりで使っていたわけではない。この図に対応してはいないが、真澄はアイヌの家の外観は萱葺きで汚

く、むさくしく見えるものの、中に入ってみると、案外に広く清らかで、シヤモの家より住みやすそうだという評価をしていた（『蝦夷廻天布利』②114～116）。

この絵では室内を詳しく描こうという意図は弱く、真澄の関心は「広き榻」の上に、両足を立てて、膝のうゑに両手を組んで座っている、およそ三十歳近頃の「婦女」①に注がれている。真澄の観察によれば、その女性は「耳環キンガレにいろいろの珠玉タマを飾り、頸リクチにもリクトンベとてくさぐさの珠をつらぬき纏マっていた。とくに首に巻いたリクトンベからは「遠き神代」の「頸クビにうなげるとま」を想像した。天註に「素戔鳴尊、以其頸所嬰五百箇御統之瓊」の文を引用しているので（出典は記紀神話か）、そのすがたが思い浮かんだのであろう。

アイヌ女性の装身具としては、「耳環キンガレ」（耳飾り、ニンカリ）、首に巻く「リクトンベ」（咽玉輪、首飾り小帯、レクトンベ）、そして首から胸に垂らす首飾りがある。首飾りには玉を連ねたタマサイ、それに円盤形が多いが金属製の飾り板をつけたシトキの2種がある。この図の女性の場合、大きめの耳輪が描かれ（2）、首には青玉のような連ねた飾り（3）がみられる。耳輪に玉を飾りとあるので、金属性の輪に飾り玉がついているのであろう。首部分の飾りは胸に垂れていないようであるから、真澄が記すようにタマサイではなくリクトンベなのであろう。リクトンベはふつう布裂の小帯に飾りを縫い付けたものが知られているが、真澄の見たものは連ね玉だったようである。ニンカリは男女ともにするが、リクトンベ、タマサイは女性のみである。図の女性は口の周りを青く彩色し（4）、手の甲から手首にかけても青線（5）が見られる。これも女性に限られた文身（入れ墨）であるが、口元の青からはほのかな印象を受ける。

アイヌ女性が座っているのは土間のうゑに作られ

ているセツカと呼ぶ床⑥である。真澄は「榻」「高榻」「床立」という漢字を当てている。木の二叉（7）をうまく利用し、セツカの支えとしている。セツカの上に敷かれているのは、「文繡シタラヘ筵」（あやむしろ、8）であろう。別な箇所にも、この筵は「蒲の葉に木の皮、かづらの皮などを文に染ませ」てとあり、どこのコタンでも婦人（メノコ）が織るものであった（②106）。

女性の背後（家の奥隅）に吊るされているのはセトフ（シュト、シト、叩く物、棍棒、9）で、本文説明によれば、槌に鉄条をさし入れた3～4尺の長さのものという。図では、木製であろうが、打ち叩く錘の部分に、縦に何筋もの溝を入れ、三角形の凹凸になるようにつくってあり、手で握るほうの細い部分には3本の縄状のものが結びつけられている。本文の説明とは違う感じだが、さまざまな形状のものがあつた。アイヌの間で紛争が生じたとき、このセトフで互いに心ゆくまで打ちあうことによつて、腹黒に言い争っている間柄でもうちなごむのだという。シヤモが「槌撃」と呼ぶ、紛争解決のためのアイヌ社会の慣習であつた。また、セツカの下に、「木糸アツシ巾の布を、ひた巻にまきたる」短い槌子（10）が片付けられないままに捨て置かれているが、これは子どもたちが槌セトフ・ツチウチのわざを覚えるための練習の棍棒なのであつたと、真澄は推測している。

絵の左上の横棹に掛け並べた、「熟菓柿イロツケルカキ」（11）を梢ながらみるようだと形容している袋状のものは小さな魚の胃で、その中にはキナボ（マンボウ）の油が入っていた。真澄はレブンケの浜で、マンボウ魚を目撃していたが、噴火湾はマンボウ魚のさかんなところで、絞めて油を取り取引品にもしていた地域である。キナボの油は自家用の調味料として欠かせないもので、家のあるじのメノコが床を立ててこの油をとりおろし、新鮮な魚のつくり肉にかけて、真澄を案内してきたアイヌの人たちに食べさせている。

#### 【参考文献】

高倉新一郎「錘打考」『アイヌ研究』（北海道大学生協同組合、1966年）。

## 4 豎白・横白 (ネマリ白)



- 1 アツシ (アットウシ) を着たアイヌ女性
- 2 大臼・豎臼 (ニシウ)
- 3 小杵・豎杵 (ユウダニ)
- 4 胡坐をかくアイヌ男性
- 5 横臼 (ネマリ臼、ヒルマシ〇ウ)
- 6 豎杵

図版A・B 『百臼之図』異文一 (大館市立中央図書館所蔵自筆本)  
 自筆本 『菅江真澄民俗図絵』下巻 (岩崎美術社、1989年)、A・  
 p475 (カラー)、B・p481 (カラー) / 『菅江真澄全集』第  
 9巻、A・図版255番 (モノクロ)、B図版258番 (モノクロ)

菅江真澄は文化5年（1808）夏の初め、出羽国白沢という山郷にいて、それまで旅の折々に各地で写生してきた白の図を編集し、白水白麿撰として『百白之図』をまとめた。採録の範囲は東海・信越・奥羽・蝦夷地などにわたり、搗白、挽白など全部で87図を収めている。そのうち、アイヌの白は其一～其四と番号がふられた4図（図版⑨232～235）である。其一（図版⑨232）には、和人（シヤモ）が踞白（ネマリ白）と呼ぶ座白（ヒルマシ〇ウ）の図が2つ、其二（図版⑨233）には、木白（ニシ〇ウ）、座木白（ヒルマニシ〇ウ）、簸箕（ムキ）それぞれの図、其三（図版⑨234）には木杵子（ユウダニ）の図3つ（いずれも豎杵）と座白の図4つ、其四（図版⑨235）には白の図が2つ（くびれ形の白とずんどう形の白）、そのうちずんどう形の1つは「酒祭」（サカホカヒ）のときの「木索」（イナヲ）をつけた図、となっている。

また、『百白之図』には草稿の異文が残っており、その異文一にはアイヌの白関係が5図（図版⑨241、図版⑨255～258）みられる。図版⑨241は「蝦夷の嶋」の小蹲白（ポンニシウ）の図で、松前の浦人（漁民）が水無月頃に「ひろめ」（昆布）を刈るために蝦夷地に行き、その土地の白に見習って横白を作り、これを踞（ネマリウス）と呼び、安座して米を舂く、と説明している。同じ形状の白は『百白之図』図版⑨234、およびこのあとに述べる図版⑨257にもみられる。Aの図版⑨255はアイヌ女性（1）が立ち姿で、右手に豎杵を持って豎白を搗いている図で、其一蝦夷国風俗、大白（ニシウ、2）、小杵（ユウダニ、3）と呼称を記している。豎白の形状は、白の下のほうがくびれた形をしている。図版⑨256は其二とし、図版⑨255・図版⑨233にも描かれた大木白（ポロニシ〇ウ）1腰をはじめ、座白（ピルマニ）3腰、簸木箕（ムキ）1枚（ヒトヒラ）の図である。このうち座白1つと箕1つは図版⑨233と同じものようである。図版⑨257は座白3つを描く。ここにも前述のように和人（シヤモ）が踞白（ネマリウス）と呼んでいるもので、アイヌの白には「縦ざま

なる白」（豎白）と「横ざまに作」った「横白」とがあり、横白では7～8升、あるいは5～6升の米を舂くとしている。Bの図版⑨258はアイヌ男性（4）が横白（5）を前にして胡坐をかいて座り、右手で豎杵（6）を持ち、稗を精白している図である。

真澄はこの図をどこで描いたのか、『蝦夷廻天布利』『続えぞのてぶり』の本文にアイヌの白の記述が出てこないのが不明である。異文一の図版⑨255に「蝦夷国風」（エゾノテブリ）に記したとあるが、その該当部分は省かれたか、欠損部分にあたるのだろうか。ただ図版⑨234に、ヤムオコシナキ（ヤマコシナキ）、シヤクコタム（シヤコタン）の地名をあげ、その所の「ふり」（風俗）だとしているので、そこでの写生なのであろう。

これらの図から、アイヌの白・杵は、横杵が描かれていないので、豎白（くびれ形、ずんどう形）あるいは横白と豎杵の組み合わせであったことが知られる。真澄はとくに座白に興味を持ち、「遠きくにべ」に「いにしへぶり」が残っているとして興味を覚えていた。豎白・豎杵は稲作とともに伝来し、弥生時代から使われていた。北方社会・アイヌ社会では、札幌市K39遺跡からくびれ形の豎白・豎杵が、千歳市美々8遺跡から座白・豎杵が出土しており、擦文文化期にさかのぼることがわかっている（氏家等『ものとテクノロジー』）。座白（横白）も豎白同様、はやくからアイヌ社会に伝わっており、江戸時代にも引き続き使われていたことになる。横杵、石臼や挽臼の類は真澄や他の近世人の観察には目にふれていないようなので、アイヌ社会ではほとんど使われていなかったのだろう。

秦檜丸撰『蝦夷生計図説』（『日本庶民生活史料集成』4、三一書房、1969年）によると、粟や稗を穂刈した穂はサラニツブや俵に入れて蔵（ブ）に保管しておく。食するたびごとに蔵から取り出し、チセのなかの囲炉裏の上に吊るした、葎を編んだ簾のようなものに載せて干す。干した穂は、チセに付属したチセセム（小棟屋）で、そのまま臼に入れて舂く。晴天のときは家の外で舂くこともある。舂き終わっ

たら箕でふるいわけ、糠はイナウが立ててある決まった場所に捨てるという。図には、蔵から取り出し、臼で舂き、糠を捨てるまですべて女性が描かれていることから、臼で舂くのは主として女性の労働であっただろうか。ただし、真澄の図では女性の他に男性が稗を舂いているものがあり、女性と決まっていたわけではなさそうである。

臼・杵のアイヌ語呼称であるが、萱野茂『アイヌ

の民具』（すずさわ書店、1978年）によれば、臼はニス、杵はイユタニ、箕はムイと呼ぶ。大型のニスで脱穀し、小型のニスで精白する。横臼はサマッキニスといい、かなり小さいもので、1人暮らしの老人が穀類を搗くのに用いたという。真澄が座臼に作業する男性を描いたのは想像ではなく、実際に見てのことであろう。

---

**【参考文献】**

氏家等 『ものとテクノロジー』北海道出版企画センター、2006年。

氏家等・池田貴夫・舟山直治・右代啓視「臼・杵類の分布、形態、用途に関する調査報告」『北海道開拓記念館調査報告』40、2000年。

# 5 食用の草の根



- 1 イケマかずら (いけま)
- 2 象山貝母・おおうばゆり  
(トレッツフ・トゥレフ)
- 3 篠笋・ささたけのこ  
(トベエツイ)
- 4 似白筴 (ヌベ)
- 5 トレッツフの円盤状にした団子

図版A・B 『蝦夷喧辞辯』(秋田県立博物館所蔵模写本)  
 自筆本 『菅江真澄民俗図絵』上巻、A・p77(カラー)、  
 B・p79(カラー) / 『菅江真澄全集』第2巻口絵写真、  
 A・82番(モノクロ)、B・83番(モノクロ)

『蝦夷喧辞辯』寛政元年（1789）5月2日、クドウの運上屋に、ウベレコ、シロシロという名の2人のアイヌの婦人（メノコ）が木皮袋（サラネフ）というものに、イケマかずら（いけま、1）、象山貝母（トレツフ、おおうばゆり、2）、篠笋（トベエツイ、ささたけのこ、3）、独活（チマキナ、うど）、似白笈（ヌベ、4）といった草の根をたくさん採取して背負ってきた光景を真澄は見ている（②35～36）。その植物の図がAの図版②82である。象山貝母の天註には、後年書き加えたものであるが、みちのくではツバユリ、ツンバユリ、オホバユリ、ヲバユリ、ウバユリ、ウバイロ、ともいうと記している。運上屋が食用となる草の根類をアイヌの女性に頼んで採ってきてもらったものだろうか。

アイヌの人々にとって、草の根は重要な食料で保存食ともなり、女性たちによって採取された。真澄は、寛政4年（1792）6月3日、噴火湾沿いにあるシラリカのウセツペのアイヌの家に泊ったが、そこで、ブキ（プイ、えぞりゅうきんか）という黒く乾いた草の根を編んで柱にかけ、ブクシヤ（プクサ、ぎょうじゃにんにく）を刻み、あるいはトレツフの根を舂いて餅菜のごとくにして大きな酒樽（シントコ）、あるいは小樽（ニヤトス）に入れて保存し、朝夕の糧にしていると記している（『蝦夷廻天布利』②115）。ここにも天註があり、先と同様の注記とともに、蝦夷人はうばゆりの草をアヨウロといい、トレツフとは根を制し団丸にしたものをいうと記している。

真澄はトレツフ（2）に関心を持ったとみえて、同じような説明を繰り返している。それだけ重要な食料と理解したためだろう。トゥレナ（オオウバユリ）の食べ方であるが、『聞き書アイヌの食事』（農山漁村文化協会、1992年）によると、鱗茎を細かく刻んで乾燥させておく方法もあるが、澱粉を取るために搗いて水にさらし、澱粉と滓（かす）に分離する。澱粉はさらに一番粉（白い澱粉）・二番粉（色のついた澱粉）に分け、乾燥させる。滓はそのまま乾燥させ水を加えて搗き団子に丸める方法、あ

るいは滓を発酵させたうえで平たい円盤状の団子にし真ん中に穴をあけて乾燥させる方法があった。真澄が酒樽・小樽に入れていると記していたのは前者、Bの図版②83に描かれる円盤状のもの（5）は後者の、澱粉滓の利用を示しているのだろう。真澄は寛政元年（1789）5月27日、泊めてもらったヲトベの津鼻の和人の家で、うばいろ（トレツフ）の根を火で蒸し焼いたのを食べさせてもらっている（『えみしのさえき』②58）。また、寛政4年3月15日に山谷で自ら採取してきた「うばいろ」の根を焼いて食べているが（『智誌摩濃胆咀』②226）、これらの場合は鱗茎を直に焼いているのだろう。

イケマ（1）について、真澄は『布伝能麻迹万珥』という随筆で、「こさふかばくもりもぞするみちのくのえぞには見せじ秋の世の月」（『夫木集』）の古歌のコサをめぐって、これは木貝であるとか、胡笛であるとか、胡国の胡沙であるとか、まちまちに語られていることに対して、イケマの根のことであるかもしれないと述べている（⑩70～73、また「しのはぐさ」にも同様の記事あり⑩326～327）。

アイヌに「訳詞」（通詞）を頼んで胡砂のことを問うと、イケマの根を持ってきた。イケマには毒があり、鮑を突くとき、これを口で噛み砕いて潮に吹いて小波を鎮め、漁に風が激しければ、風に向って吹くこともあるという。吹くから笛などを連想するのは誤っているという解釈だった。真澄はまた、下北の田名部では、凶歳にこのイケマを掘って糧として食べ、浦人がみな命が助かったとも記している（⑩72）。イケマを使ったまじないは、知里真志保の『分類アイヌ語辞典』（著作集別巻Ⅰ、平凡社、1976年、p41～45）に詳しく、真澄が記すような「天気直しの呪法」や、病魔退散などにも利用されていた。イケマの根には毒があるので、炉の焼灰の中に埋めて焼いて食べたとある。

ヌベ（4）というのは何であろうか。真澄全集の校訂者は「おおしゅろそう」という和名を与えているが、アイヌの食用植物のことを書いた本にはいくつかみだかぎりでは出てこない。知里前掲書の「ギ

「ヨオジャンニク」の項には、ヌペなる語をそれに当てている辞書や、「シュロソオ」(有毒)に同定する書物のあることが指摘されている(p195、p258補注)。ヌベについては、寛政元年5月1日、真澄が相泊で水を汲んで帰る女にこの先の道を聞くと、少し休んでいけというので丸屋形に入ると、ヌベという草の根をアイヌになったとして、火にくゆらし

て勧めてくれたとも出てくる(『蝦夷喧辞辯』②35)。プクサ(ぎょうじゃにんにく)は花も茎も細かく刻んで乾かし保存しておく(『聞き書アイヌの食事』p182)。ふつうは茎を摘み取ってくるようだが、真澄はヌベの草の根を食べたとしている。②図82の絵では、プクサに似た植物が描かれているので、ひとまずヌベをプクサのことであると理解しておく。



# 6 酒を飲む



A

B

- 1 アイヌの男性（左側、黄色の衣服左側、胡坐）
- 2 アイヌの男性（右側、茶色の衣服、胡坐）
- 3 杯（ツウキ）
- 4 酒棒篋（イクパスイ）
- 5 カモカモ
- 6 提（ヒサゲ）
- 7 アイヌの老翁（コウシという人）
- 8 アイヌの男性（シヤバポロという人）
- 9 杯
- 10 酒棒篋（イクパスイ）
- 11 提（ヒサゲ）
- 12 煙草入
- 13 煙管差

図版 A『蝦夷喧辞辯』 B『蝦夷廻天布利』（秋田県立博物館所蔵模写本）  
 自筆本 『菅江真澄民俗図絵』上巻、A・p81（カラー）、B・p153（カラー）／  
 『菅江真澄全集』第2巻口絵写真、A84番（モノクロ）、B160番（モノクロ）

寛政元年（1789）5月2日、菅江真澄が西蝦夷地のクドウの運上屋に逗留していると、カンナグ、シキシヤという名の2人のアイヌのオツカイ（男）がやってきた。2人は居並んで、濁酒（ヤ、サケ）、濁酒と言って、運上屋の筆者（カンビ、帳役のことか）の前にカモカモという弦桶のようなものを差し出して貰う。カモカモの酒を提（ヒサゲ）に移して、2人が向いあって、盞（ツフウキ）は台とともに左手に載せて持ち、それに載せてあった鬚上（イクハシウ）を右手に取って、もろもろの「神鬼」（カモキ）の名を唱えながら、イクハシウの先端で、その酒を少しばかりいくたびもこぼして神に奉げ、それをしばらく続けてから鬚をおしわけて、気持ちよさそうに飲んだ。肴もなく、お互い酒をさしかわして時が移った。そのように『蝦夷喧辞辯』に記されている（①36）。酒を飲むにあたっての神に祈る作法が詳しく記されている早い記録といえよう。運上屋ではアイヌに対して酒や飯を提供したが、これは「介抱」と呼ばれる行為で、これをうまくやることで交易を実現していた。

Aの図版②84はそこに居合わせた真澄がその様子をスケッチしたものである。図では、黄色い衣服を着た左側の男性（1）と、茶色の衣服を着た右側の男性（2）が向き合い、胡坐をかいて座っている。衣服の色が描き分けられているが、どちらも樹皮衣（アットウシ）であろうか。あるいは黄色の方はレタラペ（草皮衣）かもしれない。右の人物（2）が杯（ツッキ、3）を左手に持ち、イクパスイ（酒捧籠、4）で神に祈っているところであり、手前にカモカモ（5）、ヒサゲ（提、6）が置かれている。図の左上には彫刻の模様がわかるようにイクパスイ（4）を拡大して描いている。

同様にアイヌが酒を飲む様子を描いた絵としては、B『蝦夷廻天布利』図版②160がある。寛政4年（1792）6月4日、ヲシヤマンベの青山芝備（しげよし）の館（ヤト）でのことである（青山についてはイルカ獺の項目参照）。真澄が去年福山の湊でみた頭太（シヤバポロ）というアイヌが館にやって

きた。福山（松前城下）には蝦夷地の各場所から首長クラスのアイヌが松前藩主に御目見（ウイマム）に来訪してくる例であったが、それを真澄が見ていたのだろう。また、青山の館に奥山のトシベツのコタンに住むというコウシという名のアイヌが訪ねてきた。コウシは年が130歳を過ぎたという老翁（チヤチヤ）で、10年ぶりで我が「主土」（ニシバ）と仰ぐ青山に会いたくて出てきたのだという。このコウシはいにしえぶりにウムシヤをし、携えてきた調度の彫工（テント）もその頃のアイヌの振りとはずいぶん違っていた。このような高齢の人はいるものだろうかと独り言をいっていると、舌人（ワザト、通詞）がいうには珍しくなく、カヤベのポンナキには140歳にもなるというメノコがいると話してくれた（『蝦夷廻天布利』②119～120）。むろん、そのままに信じることはできない。

図はシヤバポロとコウシの2人がさしで、コウシが盞をあげればシヤバポロがヒサゲでつぎ、シヤバポロが盃をとればコウシがヒサゲでつぎ、楽しく飲んでいる姿を描いている。シヤバポロは首が太く、身長が4尺に足りない人だとあるので、左手に杯（9）、右手にイクパスイ（10）を持っている方がシヤバポロ（8）であろう。コウシ（7）の前にはヒサゲ（11）が、右脇には煙草入れ（12）・煙管差（13）が置いてある。コウシがもってきた調度とはこの煙草入れをさすか。この絵に続く図版②161にはククバシ〇ウが2つ、煙草入れが2つ描かれているが、右の2人が所持していたものをスケッチしたのであろう。

Aの図版に出てくる弦のついたカモカモ（5）については舟山直治氏の一連の詳しい研究がある。この図からは酒を入れる容器であったことが知られるが、真澄はこの他にも『蝦夷喧辞辯』図版②81、『蝦夷廻天布利』図版②156、同図版②166、『凡国奇器』図版⑨146、『率土が浜つたひ』図版①46、『奥の手風俗』図版②204、『氷魚の村君』図版④774、『埋没家屋』図版⑨299、『錦木雑葉集』図版⑫120、と少なからず描いている。『率土が浜つた

ひ』以下は、津軽、下北、秋田の例である。『氷魚の村君』の図には白を伏せて、そのうえに杉でわがねた朽ち残る古い若水桶が描かれている。この桶は「弦桶」、松前の「かもかも」、船人の「味噌つぎ」と呼ばれているものに同じという。また、秋田の『埋没家屋』の図では、土地では「麻桶」、蝦夷人は「カモカモ」、松前船人は「味噌ツゲ」といい、また「ツル桶」というところもあると記している。真澄が別な箇所にてヤトスと記している樽桶も同様のものであろう。

したがって、呼称はさまざまでも北東北からアイヌ社会にかけてひろく使われていた弦つき曲物の容器であったといえる。熊送りなどを描いたアイヌ絵にもカモカモがよく描かれており、アイヌの人々の身の回りにある小型の日常的な容器であった。真澄のA図版のものは黄色っぽいので違うようであるが、別の史料によれば黒または朱の漆塗りで蓋付きもあり、また、大中小からなる入れ子式のものもあった。用途も酒だけでなく、水や油や食料など入れるのに便利であった。真澄は触れていないが、升に代わる計量具としても使われ、不等価交換でカモカモが小さくなっているとしてアイヌの不満が出されることもあった。

つぎにA図版②84、B図版②160の両方に出てくるヒサゲ（提、6・11）についてである。真澄は『粉本稿』図版⑨25に、出羽の国のこととして、帆

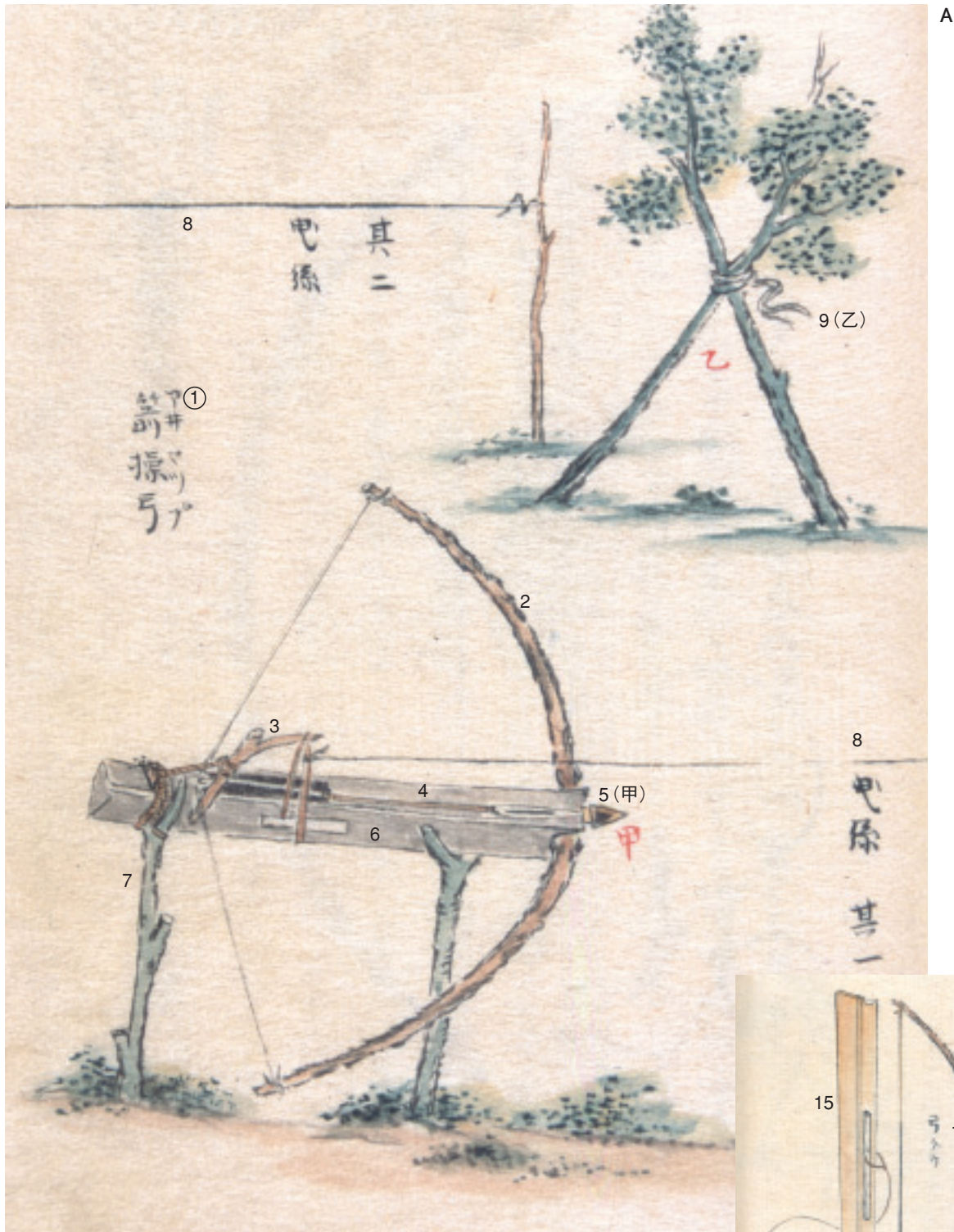
立貝の貝やき皿とともにヒサゲを描いた図を残している。真澄はこのヒサゲについてとくに記述していない。津軽地方の生活文化を図入りで説明した『奥民図彙』（『日本農書全集』1、農山漁村文化協会、1977年）によると、ヒサゲ（提）あるいはヒサゴともいい、酒を盛る器で、大小あり、大は1升5合くらい、小は1升くらい入る。木をもって挽いた割り物で、注ぎ口がつき、内側を赤漆、外側を黒漆で塗り、模様を黄赤でつける、と説明されている。真澄のこの2つのヒサゲの図も、内は赤、外は黒となり、外側に赤い模様がついているので、『奥民図彙』の説明に合致している。

小玉貞良筆（またはその写本か）とされる『蝦夷国風図絵』にアイヌの松前藩主謁見の場面があるが、これにも内は赤、外は黒の同様のヒサゲが描かれ、ハレの場の杯事には欠かせない酒の容器であったことが窺われる。真澄はこのヒサゲのアイヌ語を記していないが、『アイヌ芸術』金工・漆器篇（新装版、北海道出版企画センター、1993年）はこのヒサゲに「陸奥片口」の名称を与え、奥羽地方で生産されてアイヌ社会に入ったとし、アイヌはこうした片口類をエトヌプ（注口の突出したもの）と呼んだと解説している（p524、図版52）。玉蟲左太夫『入北記』（北海道出版企画センター、1992年）に「南部柄提」の名が見えるので、浄法寺がその生産地の一つであったのは間違いないだろう。

#### 【参考文献】

- 浅倉有子「浄法寺漆器の生産と流通」（『中世の城館と集散地』高志書院、2005年）。
- 舟山直治「菅江真澄にみる民具の消長——カモカモという容器から——」『真澄学』3、東北芸術工科大学東北文化研究センター、2006年。
- 舟山直治「カモカモの形態と利用からみたアイヌ民族と和人の交易と物質文化」『アイヌ文化と北海道の中世社会』北海道出版企画センター、2006年。
- 菊池勇夫「カモカモ（鴨々）について——コトからモノへの関心——」『非文字資料研究』8、神奈川大学21世紀COEプログラム、2005年。

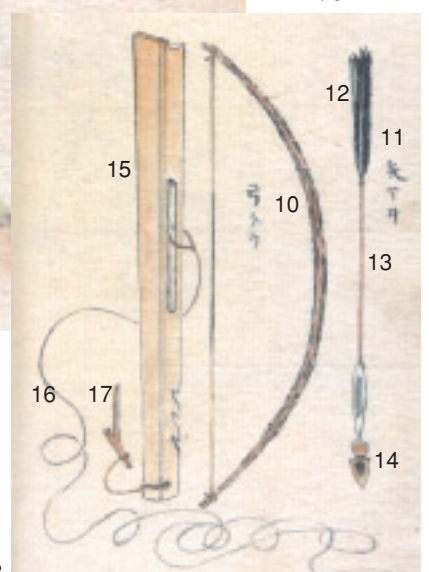
# 7 狩猟——仕掛け弓



A

- 10 弓 (グウ)
- 11 矢 (アキ)
- 12 二つ羽
- 13 籠
- 14 毒竹鎌
- 15 台座
- 16 曳線
- 17 鉤

- ① 箭操弓 (アキマツブ)
- 2 弓 (グウ)
- 3 鉤
- 4 矢 (アキ)
- 5 毒竹鎌 (甲)
- 6 台座
- 7 支えの叉木
- 8 曳線
- 9 標 (乙、目印)



B

図版 A・B 『蝦夷廻天布利』(秋田県立博物館所蔵模写本)  
 自筆本 『菅江真澄民俗図絵』上巻、A・p173 (カラー)、B・p175 (カラー) / 『菅江真澄全集』第2巻口絵写真、A・170番 (モノクロ)、B・171番 (モノクロ)

菅江真澄は寛政4年（1792）6月10日、有珠山に登った帰り道、ある家でアイヌが弓を作っているのを観察している（②137）。小刀（エビラ、マキリ）ひとつを使うだけであるが、真鉋（ピルカネ、マガナ）で削ったような精巧さだと評している。矢は「竹箭鏃」（竹製の鏃）をさす矢の基幹部分の「篋」（の）には高萱の茎の太いのを使い、それに鴟（ガビウ）の羽を四つ羽、あるいは二つ羽にして、蝶鮫の腹から取るという魚肚（ユウベ、ニベ、にかわ）で接合し、元末を糸で巻いて作る。「ことなれることなし」と述べているので、和人の矢の作りかたとそれほど違ってはいないのであろう。

「竹鏃」（5・14）には毒（シウル）を塗っている。弓（グウ、2・10）を引いて矢を射るばかりに装着したアキマツプ①と呼ぶ弩（グウ、ド）を野山に設置しておく。獣には大小があるので、自分の手や腕、肘、あるいは膝、腰などの身体部位によって、鼠（エリモ）、兎、狸（モヨク）、鹿（ユツフ）、羆（チラマンデ）のそれぞれの長（タケ）を覚えておき、親指をかがめたり、指を突きたてたり、あるいは立って高さを調節する。そうして設置した操弓挟矢（アキマツプ）に長い糸（ガ、8・16）を引き張っておき、もしこの線に少しでも触るならば、毒気（シウル）の箭（アキ、4・11）が飛んできて、獣の身に突き刺さり、命は滅ぶ。

アイヌの浦山（コタン）に案内もなく立ち入り、このアキマツプに撃たれて身を失ったり、放牧している馬などが撃たれるケースは少なくないという。もし間違っただけでこの毒箭にあたったときには、中毒（シウル）したあたりを小刀で、肉（シシムラ）を割いて取るほかには術がないとのことだった。九州の筑紫あたりにある兎路（うじ）<sup>ヌミ</sup>弩もこのような種類のものだろうと語る人がいた。

真澄のアキマツプの2枚の図はこの本文に対応している。毒矢（4・11）を装着し山野に設置したところを描くA図版②170と、分解図のB図版②171とであるが、Aの絵中にも、羆、鹿、あるいは狐、うさぎ、山鼠、むささびにいたるまで、その獣のた

けを自分の身体で測る規矩があると記している。アキマツプのかたちが「樓弓」に似て「両廣葉箭といふ弩」に同じとするが、それらがどんな弓・弩なのかはかえってわからない。Aにはさらに「毒鏃に竹葉をとりおほひて雨露をふせき 標を立て人を避り」といった説明を加えている。図Aの（5・甲）の竹鏃の部分が露出しているが、これに竹葉を被せておくのであろう。標（しるし）は（9・乙）にあたり、2つの小木を交叉させて、交接部分を紐で括って、アキマツプの設置場所を知らせていた。

6月15日、真澄がシラリカのアイヌのチセキ（家）に泊めてもらったとき、室内に「ささやかつくりたるアキマツプ」をかけてあるのを見ている（②147、図版②172）。そして、炉の樺（カニバ）の火が消えるころ、鼠（エリモ）がそれにはじかれたのか、うめく声が聞えた。家の中で鼠を捕る道具としても使われていたことになろう。

真澄がアキマツプに撃たれる放し馬のいることを記しているので少し触れておこう。蝦夷地に馬が本格的に導入されるのは寛政11年（1799）の蝦夷地幕領化以後のことで、文化2年（1805）にウス、アブタに馬牧が開設されている。真澄の旅はそれ以前なのであるが、すでにウス・アブタ辺では馬が放牧されていたことになる。木村謙次『蝦夷日記』寛政10年6月2日条に、「白番人江領主より馬ヲ預ケ十ヶ年程之内小馬六十三疋上納、野飼ニいたし置用ニ成計ヲ捕候間…」（『蝦夷日記』p81、山崎栄作編集・発行、1986年）とあり、幕府直轄以前に松前藩による放牧が始まっており、真澄の記述を裏づけるものとなっている。

アキマツプを描いた絵は真澄以外にもいくつか知られている。秦憶丸『蝦夷島奇観』（雄峰社、1982年）には「アマクウ」の図として掲載されている。獲物としてキツネが描かれる。アマは置くこと、グウは弓の意味だとし、獣の大小にあわせ、「矢の高卑を手束にはか」って調節するという。手束（たつか）とは手の握りのことである。アマクウの設置したところには必ず木に木幣を立てておくことあり、絵

をみると、人の目線にあう高さで、太い木の幹にイナウを紐で縛っているのがみえる。真澄の標とは違っている。

松浦武四郎も仕掛け弓の絵を残している一人である。「アマホ」の図（『再航蝦夷日誌』p239、『三航蝦夷日誌』下巻、吉川弘文館、1971年）、「アマクウ・置弓」（キツネ、『蝦夷訓蒙図彙』p77、『松浦武四郎選集』二、北海道出版企画センター、1997年）、「オキユミ」（クマ、『天塩日誌』p516～517、ただし南谷写、『松浦武四郎紀行集』下、富山房、1977年）がそれである。『再航蝦夷日誌』の本文によると、その図は武四郎がカラフト南端の白土滞在中、鯨や数子を積んで置いた雑蔵に夜中クマが出てきて被害を与えそうだったので、その道筋に仕掛けたのを描いたものだった。その夜からはクマが出現せず、アイヌの話では、この里の近くに住むクマはかしこくて箭を仕掛けると決して出てこないのだという。真澄の絵と比べると、弓矢を装着する台座部分が真澄の図では柱状であるが、これは扁平な板状となっている。熊にただ1本突き刺さっただけで、10間に満たない距離で斃れてしまうほどの毒の威力であった。この毒を解するには巻柏を黒焼きにして用いれば効くとも聞いている。武四郎もこの仕掛けの場所

には木幣を立て、人間が行かないように目印にしたと記している。また、『天塩日記』の図で着目されるのは、これも台座が板状であるが、曳き線が2本描かれていることである。クマという大型獣だからであろうか。同様に作者不詳の『蝦夷風俗図』に掲載されるクマの仕掛け弓（「置弓毒矢」）も2本の曳き縄となっている（『アイヌの世界』図版13、鹿島出版会、1968年）。

以上の仕掛け弓は毒箭が水平方向に発射される装置であったが、間宮林蔵述・村上貞助編『北夷分界余話』（文化8年・1811、『東轡地方紀行他』平凡社東洋文庫、1988年）の「獲獺」の図（p57）では、それとは違って垂直方向に上から地面に発射される仕組みになっていた。林蔵がカラフトで観察したカワウソ猟の「自発弩」であるが、垂糸の先端に魚の餌を吊るしておき、これに食いつくと矢が真上から発射され獲物に突き刺さった。カワウソの習性を利用したものであろう。

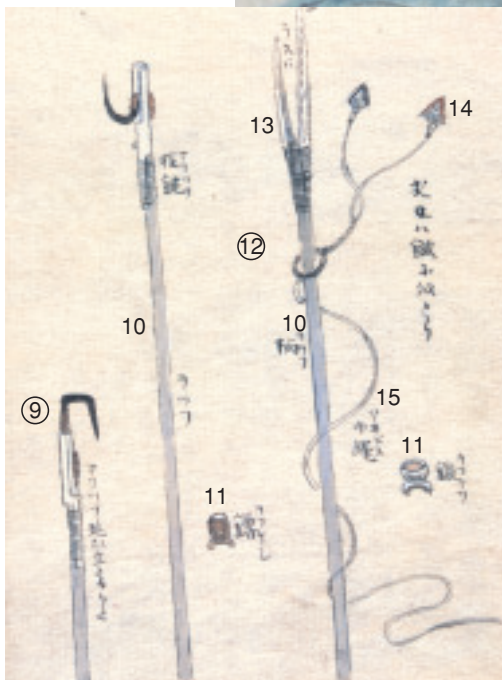
この仕掛け弓の名称は、アキマツプ、アマクウ、アマホウ、アマホ、と一定していない。『アイヌ民族誌』ではアマックウと表記している（上p327、第一法規出版、1969年）。トリカブト毒を使った仕掛け弓は、アイヌの主要な狩猟具であった。

# 8 イルカ猟

A



B



- |                                 |              |
|---------------------------------|--------------|
| 1 イルカ (タンヌ・タンノ)                 | 8 小縄 (アキドス)  |
| 2 アイヌの舟 (車權)                    | ⑨ 投鍵 (マリツフ)  |
| ③ 投鍵 (マリツフ)                     | 10 ラツフ       |
| 4 柄 (ヨツフ)                       | 11 ヲフケシ      |
| ⑤ ハナリ                           | ⑫ ハナリ        |
| 6 ラスバ (1つあるをアリンへ、<br>2つあるをウレンベ) | 13 ラスバ       |
| 7 鎌 (ギテキ)                       | 14 鎌 (ギテキ)   |
|                                 | 15 小縄 (アキドス) |

図版A・B『蝦夷喧辞辯』(秋田県立博物館所蔵模写本)

自筆本 『菅江真澄民俗図絵』上巻、A・p161 (カラー)、B・p163 (カラー) / 『菅江真澄全集』第2巻口絵写真、A・164番 (モノクロ)、B・165番 (モノクロ)

噴火湾（内浦湾）の沿岸地域はアイヌの人々によるオットセイ、イルカ、マンボウの猟（漁）がさかんなところであった。真澄は寛政4年（1792）6月4日、ヲシヤマンベの商場知行主である青山芝備の館に入って3泊しているが、そこでウネヲ（海狗、オットセイ）のレパ（漁）について詳しく聞き、日記に書き残している。ヲットセイは「雄元」（陰莖、チエキ、タケリ）が薬となったので藩への上納物となり、青山氏もその役を勤めていた。漁の時期は鮭（ヘロキ）が集まってくる冬の時期で、海が平波（ノト、ナギ）になるよう祈祷する。男（ヲツカキ）たちが出漁していくと、家にいる女（メノコ）や子供（ヘカチ）は体を動かさず寝ているだけである。鍼（ケム）を使ったり、木布（アツシ）を織ったり、飯を炊いたりして体を動かすと、潮と波を枕にして寝ているウネヲがそのまねをして動き回り、ハナリ（投げ鉞）が当たらないのであるという。アイヌの人々にはそのような禁忌があった（②120～122）。

「黒魚タンノホロノヲカイ許多」と題されたA図版②164のイルカ漁は、真澄が7日、アイヌの「葛にとどたる船」すなわち縄綴船（2）に乗せてもらいヲシヤマンベからアブタに向う途中で目撃したものである。シツカリ（静狩）の崎（シリ）を経て、ケボロオキの岩舎観音（『蝦夷廻天布利』図版②162）などをめぐった後、船上で休憩していると、イルカ（タンヌ、タンノ、1）が群れて来て、5～6尺も波を離れて飛び上がった。アイヌがこれをみてハナリ（離頭鉞、⑤）を撃とうとして、柄の先のアリンヘ（6）にギテキ（鉞、鉞頭、7）をさし、ギテキにはアキドス（8）という細い縄をつけたハナリの柄を額にかざしてねらいをさだめたが、それに恐れてかタンヌは波の底に深く沈んでしまった。これを残念がったが、なおも舟で追った。

A図版②164には2人組みの蝦夷舟（2）が2艘描かれている。舳先側のアイヌが漁をする役目で、艫（船尾）側のアイヌが左右の車櫂を漕いでいる。左舟と右舟のアイヌが持っている漁具は、B図版②165に図解され、左舟のほうは万利都府（マリツフ、

投鍵、③・⑨）、右舟のほうは本文にも出てきた波奈離（⑤・⑫）はハナリと知られる。絵中の「波奈離」の説明文には、柄の先につけたラスバ（13）がふたつあるのをウレンベ、ひとつあるのをアリンヘといい、また、ラスバに装着する鋏（14）をギテキ、石突（11）をヲフケシ、柄（10）をヲツフ、小縄（15）をアキドスと呼び、投げつけるとギテキもヲツフもヲフケシも3つ離れになる「ほこ」であると記されている。なお、石突（いしづき）というのは柄の下端部に被せるようにつけてあるものである。A図版164の右舟のハナリ⑤はラスバ（6）のギテキ（7）が2つあるのでウレンベということになる。一方、B図「万利都府」の説明文には、投げて魚をうつ鍵のことをマリツフ（投鍵、⑨）といい、柄（から、10）は同じくヲツフといている。魚を撃てば鍵の部分が延びて立つようにしてあるもので、それを引き寄せて獲物を得る。一般に前者をキテ、後者をマレックと呼んでいる漁猟具である。

噴火湾のクジラ猟については、名取武光「噴火湾アイヌの捕鯨」が実際にクジラ（フンベ）漁をしたことがあるアイヌの翁の体験談を記載している。1938年の聞き書きで、およそ50年前、30年前のクジラ漁である。それによると、クジラを突くのは新暦の5月頃のことと、他の魚や海獣を突いていて、クジラが近くに浮かびあがると、毒のついたハナレを投げる。10間から15間は容易に投げるのだという。毒はトリカブトの根から採ったもので、ハナレの先金の湾曲したところに塗り込む。真澄の記述の中には鋏に毒を塗るとは出てこなかったが、聞き漏らしたのであろうか。動物の体に突き刺さると、柄は抜けてハナレの先の部分だけが体中に残り、その手繰紐を引き寄せて獲った。1艘の舟に2人か3人が乗組み、ハナレを投げるのは舳先の人とあるので、真澄のA図版②164の絵と違わない。30年前のクジラ漁では十数本のハナレを撃ち込み、クジラは最後には浜に頭を突っ込んで果てたという。

名取はハナレの部位の呼称も採録しており、真澄のものと比較することができる。鉞頭（キテ）、柄



(オプ)、綱(ツシ)の3つの部分からなり、柄はその先端部分をラスバというときには、手で持つ部分のみオプという。真澄のいうヲフケシ(石突)はオプケンで、オプの後端にある手掛けと説明している。この手掛けのところを強く押し出して投げる。アキドス(小綱)はハイトシといい、20尋もの長さがある。ラスバ1本のアリンへはエアンラス、またはアレンベ、2本のウレンベはツウレンベといい、さらに3本ものものがあり、それはレウレンベというのだとしている。真澄の絵には名称がないが、オプとラスバを結びつけている縄はオプセシケカ、A図版②164の投げられたハナリの柄の中間部分で索縄を通しているところがあるが、その部分をイカブといい、それよりキテに近いところで索縄がゆるく結ばれてみえるような部分がオプトム、また銚頭(キテ)の部分では、先金をノット、体をつまむ、尾をチニヒ、索縄の穴をニンガパイ、銚頭につく細い縄をニンガと呼び、それがやや太めのハイトシに結ばれる。

真澄の絵は鯨のような大型の漁ではなく、小型のイルカ漁の様子を描いたものであるが、その漁猟具の観察力は名取のそれに比べられる正確さをもっていたといえよう。

噴火湾に現れるクジラ類は、名取によると、フンベ(鯨)と、カムイフンベ(鯨、シャチ)、そしてタンヌツプ(海豚類)の3種類に分けられ、フンベ、タンヌツプはさらに何種類かに識別されていた。シャチがカムイとされるのは、シャチが鯨を駆逐して海岸に打ち上げ(寄鯨)、恵みをもたらしてくれることに対する畏敬の念からであった。

真澄は「黒魚」漁をみたあと、キナボ漁をするアイヌに出会っている。ハナリが突き刺さったキナボを切り捌き、あぶらわたを取り出し、肉を切り取った。そして、左右の鰭にキナヲを削って刺し、ハナリの柄(カラ)の石つきで海底に突き入れていた(②127)。

#### 【参考文献】

名取武光「噴火湾アイヌの捕鯨」(『日本民俗文化資料集成』第18巻、三一書房、1997年)。

菊池勇夫「石焼鯨について——アイヌの鯨利用と交易」(『東北学』7、東北芸術工科大学東北文化研究センター、2002年)。

## 9 額で担う



図版 『蝦夷廻天布利』（秋田県立博物館所蔵模写本）

自筆本 『菅江真澄民俗図絵』上巻p149（カラー）／『菅江真澄全集』第2巻口絵写真158番（モノクロ）

- |               |              |                       |
|---------------|--------------|-----------------------|
| 1 黒岩          | 4 アツシ（アットウシ） | ⑦ アイヌの子ども（鬚なし、あるいは女か） |
| 2 イナウ         | 5 額で負う       | 8 耳飾り・赤色の裂（ニンカリ）      |
| ③ アイヌの男性（鬚あり） | 6 煙草入・煙管差    | 9 裸足                  |

真澄は寛政4年（1792）6月4日、シラリカからヲシヤマンベに向う途中、ルクチという磯に来た。そこにはシヤモが黒岩（1）と呼ぶ大きな岩があり、図のように、割れ目のような狭間にいくつもイナウ（2）がさしてあった。アイヌの伝承によると、昔、

遠郷のアイヌが戦をしかけ、船に乗ってこのコタンを討とうと近づいてきたが、この黒岩の姿をアイヌがたくさん屯していると見間違い、恐れて我先にと逃げ出した。それによってコタンのアイヌを守ってくれた石神（シユマカムキ）として、今の世までも

イナウを奉げてまつているのだという（『蝦夷廻天布利』②117～118）。ちなみに、松浦武四郎はこの黒岩をクネシユマの訳語だとし、その形は火焰のごときとし、図も残している（『三航蝦夷日誌』上巻p239）。この岩を割ると、中から丸い白石が出、小は雀の玉子、大は鶏の玉子のように、大は光沢がないが、小は玲瓏として磨くと光るのだという。ただし、真澄はそのことには何も触れていない。

黒岩の前を歩く2人のアイヌは、真澄にしたがって来た者だとするが、ただ真澄の後をついて歩いてきただけのことを言っているのであろうか。道すがら雨が降ってきたが、2人は笠、雨づつみをしないで、髪が濡れるままに長い浜を歩いていた。

さて、図に描かれた右側の人物③は立派な鬚を蓄えているので成人男子であることは明らかである。はっきりとは描かれていないが、金属性の耳飾りをしているようである。衣服はアツシ（4）で、裾のほうには切り伏せらしい文様が見える。左手に提げて持っているのは別図にも出てくる煙草道具（煙管差し・煙草入れ、6）で、煙管差しの部分を手に握っている。常に携帯しているのは、喫煙習慣がアイヌ社会に深く入っていたことを示している。背中に矢筒のようなものが負われているが、あるいは荷（青色）を藁で包んだものかもしれない。判別はできない。

左側の⑦の小柄な人物もアツシを着て裸足（9）で歩いているが、耳あたりに赤いものが描かれているので、それは布（絹・木綿）の裂（きれ）でつくった耳飾り（ニンカリ、8）をつけているに違いない。ただし、この人物は女であろうか、子どもであろうか。真澄が何も記していないのは、男の子どもであったからであろうか。この人物も背中に何か荷（青色）を負っているほか、自筆本では額の前のほうにも別の荷袋のような物（薄茶色）がぶらさがっているが（模写本省略）、それでは不自然なので、

それも肩のほうにあると見るべきか。

詳細な図ではないので判断しがたい点が少なくないが、ここで着目しておきたいのは荷の負い方である。2人とも前頭部（5）で重さを支えながら運搬していることがわかる。真澄は図では他に描いてはいないが、噴火湾（内浦湾）沿いを北上しているとき、真澄がアイヌの女性に自分の衣包を持たせたことがあった。サハラへ行く道で、シウランコという婦人（メノコ）はその荷を「タアレとて、はちまきの如きものを頭（シヤバ）に引かけて荷の緒として、いとかるげに、ぬかのちからして負ひ」、先立って岨路をかけたぼったという（②109）。またホロナイの2人のメノコに旅の具を持たせるところ、「れいのごとく額スカに負緒をかけて頭（シヤバ）の力つよげに、手を拍ウち拍ち」、歌をうたって歩いた（②118）。

真澄は背負い縄をタアレと表記している。萱野茂によると背負い縄はタラと呼び、シナの木で編み、額にあてるところは幅広くつくり、タリペと呼ぶのだという（『アイヌの民具』p125）。タアレはタラをそう聞いたのであろう。真澄ははちまきようのと表現したが、「れんじゃく」という言葉を当てて理解する例もあった。この額を使った運搬には男女の性差はみられず、水桶を運ぶアイヌ女性、イカヨブ（矢筒）を背負って狩猟に行く男性など、図絵にはよく登場する。なぜ、額で負うのか、罨カに襲われたときにとっさに額から荷物はずして、危険に対処できるという説明もみられる（玉蟲左太夫『入北記』p100）。

額を使って物を運ぶ方法は、「頭背負い」「前頭部運搬」あるいはもっと正確に「前頭部支持背負運搬」などと呼ばれる。世界に目を広げれば珍しいものではないが、日本列島のなかでこの運搬法は、奄美大島・沖縄本島中北部、伊豆諸島、および北海道のアイヌに限られて分布している。

#### 【参考文献】

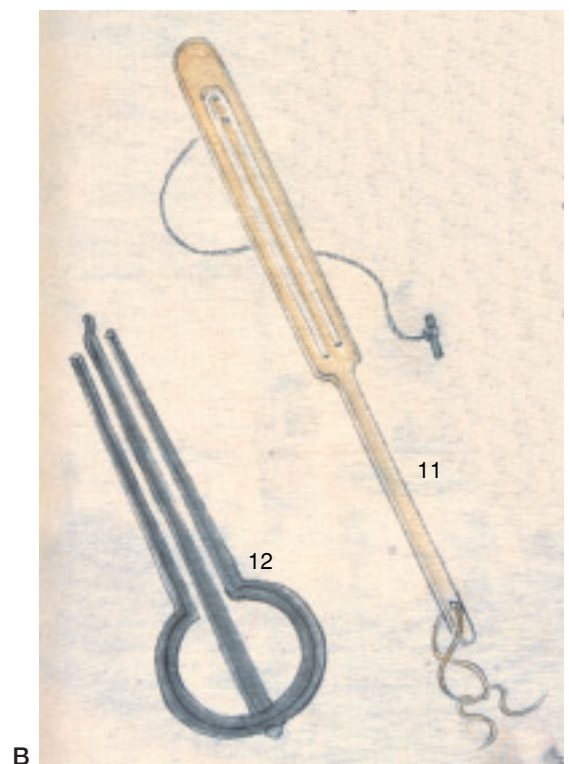
菊池勇夫「荷を負うアイヌの姿—菅江真澄の絵から」『年報人類文化研究のための非文字資料の体系化』第1号、神奈川大学21世紀COE研究推進会議、2004年3月）。

# 10 ムクンリ・ムツクリ (口琵琶)



図版A・B『蝦夷廻天布利』(秋田県立博物館所蔵模写本)  
 自筆本 『菅江真澄民俗図絵』上巻、A・p165 (カラー)、B・p167 (カラー) / 『菅江真澄全集』第2巻口絵写真、A・166番 (モノクロ)、B・167番 (モノクロ)

- ① アイヌの女子 (メノコ)
- 2 口琵琶 (ムクンリ)
- 3 耳飾り (ニンカリ)
- 4 アツシ (アットウシ)
- 5 入墨
- 6 裸足
- 7 チセ
- 8 股ぶりの木棹
- 9 カモカモ
- 10 筥 (ウケ) か
- 11 口琵琶 (ムクンリ)
- 12 鉄製の口琵琶・鉄笛 (カネムツクリ)



真澄は寛政4年（1792）6月7日、アブタのコタンに着き、泊めてもらう運上屋に入った。アイヌの栖家が80軒余もある大きなコタンである。空に雲もなく、波も静かで、たいそう面白い夕べであった。すると、弾き物のような音が聞えてきた。何の音かわからなかったの、運上屋のあるじ（支配人）に聞くと、シヤモが「口琵琶」といい、アイヌはムクンリ（2）とっているもので、その形状を説明してくれた。5、6寸くらいの長さで、網鍼（アバリ）のように竹でつくる。その竹の中を透かした中竹（シタ）のはしに糸（イト）をつけて、女（メノコ）たちが口（バル）に含み、左の手に端を持ち、右の手でその糸を曳き、口（バル）の内では何ごとかというのだという。外に出てみると、女子（メノコ、①）たちが磯に立ち群れて、月にうかれ、ここかしこで吹いている声の面白さはたえようのないものだった。その声のうちに己の気持ちをこめていえば、それに応えて別な人が吹き、また人に秘め隠していることもこのムクンリで互いに吹き通わすのだという（『蝦夷廻天布利』②127～128）。

A図版②166は、真澄がその夕、アブタの浜で見た光景を描いたもので、「蝦夷国女子含口琵琶、喚濤といふことありともいへり」と絵中に説明している。3人のうら若い娘たちなのであろう。本文の通り、ムクンリ（2）を口に含んで、右手に持ち、左手で弾いている。B図版②167の右はムクンリ（口琵琶、11）の形状を描いたもので、牟久武利（ムクンリ）または務久離（ムクリ）とも呼ぶとしている。竹製、長4寸、横亘3分、風舌に3寸4、5分の糸をつけて、これを口に含んで曳き鳴らし、口の中で歌を唄う、などと本文とほぼ同様の説明をしている。同図の左の器物は、津軽地方で口琵琶（12）と呼んでいるもので、「鉄を以て鍛へ作り、7月に鹿頭を戴き、角觥（相撲）の戯のときに、これを含んで鳴らすのだという。この鉄製の口琵琶は「蛮夷」の制作になり、むかし蝦夷国から伝わったもので、合浦海浜に流布していると述べている。

後年、真澄は『布伝能麻迹万珥』という随筆にも、

自分の『蝦夷州風俗（エミシノテブリ）』（『蝦夷廻天布利』をさしている）を引いて同様の説明をおこなっている（⑩70～73）。ここでは牟都久理（ムツクリ）と記し、今日一般にいうムツクリの呼称となっている。また、ムツクリを曳く女性は「蝦夷処女うらわかき」あるいは「丁女」「蝦夷娘」とあり、未婚の若い女性を念頭において真澄は記事を書いていたことがわかる。A図版には砂浜に浪が押し寄せているように描かれているが、この『布伝能麻迹万珥』に、つぎつぎとメノコが群れ集まってきて高砂子を踏みならし、こゝらで吹きたてると、ナギの海に響きわたり、「風たち波の寄り来る」といわれている、というのを表現しているのであろう。

B図版に描かれた鉄製の口琵琶について、『布伝能麻迹万珥』はさらに詳しく述べている。むかし、魯西亜（ロシア）人であろうか、テメテラヤカウフエという人が松前に風に放たれて来たことがあり、その船に積んでいたものの中にあつた口琵琶を浦人がもらって吹き鳴らした。のちに、松前の鉄工らがそれを模倣してつくり、漂白人の国名も吹器の呼ぶ名も忘れて伝わらず、鉄笛（クチビハ）とのみ言っている。今は松前では絶えてしまい、津軽路の鉄工が習い伝え、7月7日より、盆の仮獅子頭舞らが笛太鼓に合わせて鉄笛を吹き鳴らし踊るのだという。ムツクリとは形が少し違うが、同じ造りだと述べている。

テメテラヤカウフエという人物名は、真澄の民謡集『ひなの一ふし』に採録された「魯齊亜風俗距戲唄」の説明文にある「テメテラヤコウフエキ」と同じ人をさしている（⑨341）。この人物は中村喜和『おろしや盆踊唄考』によると、安永年間に松前藩に交易を求めて東蝦夷地に来航し、拒否されたロシア人シャバリンのことをさしているようである。シャバリンが本当に鉄笛を伝えたというべきか、確証があるわけではない。アイヌの音楽や舞踊について研究した谷本一之『アイヌ絵を聴く』によると、真澄のいう鉄笛はカラフトでは「鉄口琴（カネムツクリ）」と呼ばれていたもので、間違いなく大陸か

ら入ってきたものだろうと指摘されており、ニヴフやウイルタの人々が演奏していた。ただ、アイヌの人々にはあまり使われなかったとのことである。松浦武四郎は『竹四郎廻浦日記』に「ヲロツコ」（ウイルタ）の「ムツクナ（夷言カニムツクリ）」の図を載せている（上、口絵p12、北海道出版企画センター、1978年）。

近世の文人たちにとって、前述のように、「こさふかばく…」の和歌にある「こさ」とは何か、関

心事であった。蝦夷が吹く息が原意であろうが（金田一京助）、中国北方の胡人が吹いたという胡笳が胡砂で、出羽陸奥で吹く木貝が「こさ」であろうなどと、連想して語られていた。真澄も『蝦夷廻天布利』では、いわゆる胡笳というものはムクンリのような類で、これを胡砂ともいうのだろうかと推測していた。ただ、『布伝能麻途万珥』になると、イケマという植物の根説を採っている。

---

**【参考文献】**

- 谷本一之『アイヌ絵を聴く——変容の民族音楽誌』北海道大学図書刊行会、2000年。  
中村喜和『おろしや盆踊唄考——日露文化交渉史拾遺——』現代企画室、1990年。  
金田一京助「胡沙考」（『金田一京助全集』第6巻、三省堂、1993年）。

# 11 こうがいつき——子どもの遊び



図版 『蝦夷喧辞辯』（秋田県立博物館所蔵模写本）

自筆本 『菅江真澄民俗図絵』上巻p63（カラー）／『菅江真澄全集』第2巻口  
絵写真75番（モノクロ）

- |                   |                       |
|-------------------|-----------------------|
| 1 笹葺きのチセ          | 6 アツシ（アットウシ）用の樹皮繊維    |
| ② アツシ（アットウシ）を着た母親 | 7 男の子ども（ヘカチ）（左側、頭頂剃る） |
| 3 耳飾り（ニンカリ）       | 8 男の子ども（右側、髪伸ばす、幼児）   |
| 4 手の入墨            | 9 くいぜ（株・くい）           |
| 5 又木の物干し          |                       |

菅江真澄が寛政元年（1789）4月29日、相沼から船に乗って西蝦夷地のクドウに至り、斎藤という漁師（あま）の家に泊った（『蝦夷喧辞辯』②31）。このコタンにはアイヌの住む家（チセ）も軒を並べて入り混じっていた。絵は斎藤の家の近隣にあるアイヌの笹葺きの家（チセ、1）を描き、アツシ（アットゥシ、②）を着た母親が家の窓から顔を出して、外で遊んでいる2人の童男（ヘカチ、7・8）になにやら話しかけている様子である。母親は耳飾り（ニンカリ、3）をつけ、右手の腕には網の目状の入墨（4）がみえる。家の脇には、又木の棒（5）を立てて横木を掛け渡し、アツシに織るための木の繊維（6）を干している。葉が生えているのは、前述のように生木を伐ってきて立てているからである。

母親に比べて子どもはずいぶん小さく描かれている。左側の子どもの頭髪（7）に注意してみると、前頭と左右の耳近くに少しの髪を残し、頭頂は剃っている（後頭部はみえないので剃りの有無は不明）。右側の子どもは髪を伸ばしているようであり（8）、左側の子どものように頭髪を整える年令にまだ達していない幼児であろうか。『アイヌ民族誌』によると、3～4歳頃までは頭髪は自然に伸ばしておき、それから剃るのだという（上、p136）。剃り方には地域差、男女差があった。

ヘカチの2人は「くいぜ」（株、くい、9）のような棒を持ち出して、「かうがいつき」という遊びをしている。棒の先をくいのように尖らせ、2本の棒が地面に突き刺されている。右側の子どもがその棒を高く掲げて、相手が刺した地面の棒をめがけて倒そうとしているところである。棒を右に打ち、左に打ち遊んでいるうちに、おそらく倒した倒さないの

勝ち負けで言い争いになってしまった。母親がそれを聞きつけて、窓から顔を出して「ホンノペリ」「ルカマルカマ」と呼んだというのである。ルカマというのは、路を横様に歩く様子のもので、<sup>ママ</sup>ホンノペリもそのような人の身の癖をいい、そのようなあだ名で子供を呼んでいると、真澄は説明している。

「かうがいつき」というのはアイヌ語ではなく、和人の言葉であろう。『改訂総合日本民俗語彙』（平凡社、1955年）によると、秋田県鹿角地方ではコンゲアウジ（コウガイウチ）といって、コウガイ、コンゲアと呼ぶ棒の先を尖らしたものを地面に突き刺して相手の棒を倒して勝負を争い、倒されたほうが相手に取られるという遊びである。青森県の野辺地ではコケウチといっている。関東ではネッキと呼び、全国的に行われていた。真澄の「かうがいつき」の名称は、東北地方のこうがいうちが入り込んだものであろう。こうがいは笄（髪搔）からきた言葉であろうか。

真澄は絵を残していないが、同じクドウのコタンで、「波那離つき」という遊びをヘカチたちが集まって遊んでいるのをみている（②32）。虎杖（いたどり）の茎を1尺ばかりに切ったものを投げておいて、それに1尋（両手を広げた長さ）ばかりの篠竹の先を尖らせたものを手に持って投げ、虎杖の茎を突く。漁獵のハナリ（投げ鉞）を見習っての遊びであった。アイヌの遊びは谷元旦の『蝦夷風俗図式』（安達美術、1991年）に「クワイテンク」（棒高跳び）、「ウコカリカチウ」（輪取り遊び）が描かれている。アイヌの子どもたちは、遊びを通して狩猟などのテクニックを身に付けていった。



## 12 陸小屋・丸屋形



図版 『蝦夷喧辞辯』（秋田県立博物館所蔵模写本）

自筆本 『菅江真澄民俗図絵』上巻p57（カラー）／『菅江真澄全集』第2巻口絵写真72番（モノクロ）

- |            |                 |
|------------|-----------------|
| 1 葎帆の船     | 6 丸小屋の突端の覆い（左側） |
| 2 松明を持つ男   | 7 陸小屋           |
| 3 前垂れをつける女 | 8 青色の衣服の人物（真澄か） |
| 4 煙管をくわえる男 | 9 囲炉裏の火         |
| 5 丸小屋（右側）  | 10 物干し（タラを干す）   |

菅江真澄が寛政元年（1789）4月28日、江差の津鼻より船に乗り、夕方相沼の浦に碇を下ろし、東在の白府の泉郎<sup>あま</sup>で阿部某が鮭漁のために設営した苦小屋に宿を借りた（『蝦夷喧辞辯』②30）。翌朝、この船に乗ってクドウ（西蝦夷地）に至っているの、江差からクドウに向かう便船だったのだろう。場面は相沼に船が着いたところで、菴の帆（1）を下ろしている。この船に真澄が乗ってきたことを表現しているのか。船には7人が乗っており（他に帆の陰にも人がいるか）、大きな船ではなかった。暗くなっても、船路には「千船百船」が波をかきわけていたとあり、鮭漁もそろそろ終期であったが、そうした鮭漁の小船がたくさん通っていた。

浜には出迎えの3人が待っている。左側の男（2）は松明を持ち、右側の男（4）は口に煙管をくわえ、左手に持っているのは煙草入れであろうか。この2人の男の衣服は黄色に彩色されているので、アツシ（アットゥシ）を着ている可能性が高い。鮭漁などの和人の漁夫もアツシを着て働くことが多かった。中の人（3）は紺色の衣服に前垂れをしているので女である。この女と煙管の男は宿泊する阿部某の夫婦なのかもしれない。

阿部某はこの土地の者ではなかった。松前地の前浜は漁民（百姓）たちの総入会（共有）の漁場で鮭が群来（クキ）してきたと聞けば、そこに集まってきた鮭を獲った。図の右のほうの岸辺に円錐形の小屋が描かれている。真澄はこれを「丸屋形」（マロヤカタ）と表現している。ふつうは「丸小屋」と書かれることが多い。右のほう（5）をみると、突端に棒の先が出ており、数本の棒の上部を括り、下のほうを広げて脚とし、それに草で編んだ菴を巻きつけて組み立てた簡易な小屋であった。左側の方の突端（6）には覆いがみられる。突端は煙り出しにもなるのだが、雨が入り込まないように覆いを付けている。移動するさいにはこれを解体し、船に積み込めばよかった。

真澄は東海岸の旅でも「円舎」（マルヤカタ・マルゴヤ）で移動する昆布採り船に乗せてもらって

る。Ⅲ-2『江指浜鯨之図』にもたくさんの丸小屋が描かれているが、鮭漁や昆布刈りで移動する松前地の漁民にとっては欠かせない仮住まいの用具であった。しかし、元来はアイヌの人たちが漁猟や交易のために遠方に船で出かけていくさいの宿泊手段であり、松前城下にウイマムで来るときにも丸小屋が用いられていた。和人の丸小屋はこうしたアイヌの移動から受容したものであった。

この相沼にも丸屋形が立ち並んでいた。ここかしこに漁り火を焚いているようにみえたのは、丸小屋のなかに人が多数、ほた（木の切れ端）を焚いて居並び、「三の緒」（三味線）を弾いて歌をうたっている光景であった。鮭が群来（クキ）してくるのを待って、夜遅くまで歌って騒いでいたのである。

相沼より北で、西蝦夷地の入り口あたりに位置する平田内の「畑小屋」のような家に泊めてもらったとき、あるじが以下のように真澄に語った（②37～38）。鮭が群来（クキ）してくるころは、都まさりににぎわくなる。鮭で真っ白になった海に、ヤスの柄や船の櫂を押し立てても、土に刺したように傾かないほどに密集して浜に押し寄せてくる。舟が木の葉のように乗り出していき、また異浦に群来を知らせるために火を高く焚く。また、追鮭といって、どこからともなく船がやってきて丸小屋を立て仮住まいをする。鮭が来ない暇なときには、ただ酒盛りして三味線をひき海山に鳴り響かせている。夜になると、若者らが、姿かたちの美しい「なかのり」の女を見て通う。「なかのり」というのは鮭の魚裂き、飯炊きの女たちを漁船の中に乗せてくることから、鮭場ではそのように呼んでいる。「魚場うり」といって、物を売り歩く商人もやってくる。銭も黄金（こがね）も海から湧き出し山をなすように心得ている、そうした鮭漁だというのである。おそらく、相沼も同様であったに違いない。ただ、この年を含め近年は前浜の不漁が続き、それを嘆く人々の声を真澄はひろっている。追鮭といって、松前地から西蝦夷地への出漁がさかんになりはじめる、そのような時期に真澄は旅をしていたことになる。

この図の中央には「陸小屋」(7)が2棟描かれている。どちらも草葺で、入口や窓が開けられて、なかに人が居て、火を焚いているのがみえ(9)、家から煙が立ち上っている。真澄が泊ったという「苫小屋」というのは「丸屋形」をさしているのだろうか、それともこの「陸小屋」のほうであろうか。右のほうの「陸小屋」には青色の衣服を着た客人らしい人物(8)が描かれ、それが真澄自身のことだとすれば、ここに泊ったのであろう。2棟の間の物干し(10)に4段にわたって魚を干しているが、臭さがしのびがたく、夜が更けたと書いているから、この「陸小屋」に泊ったに違いない。

物干しに干している魚は一見スルメのようであるが、イカではなく大口魚(鱈)である。軒にたいそう高い木を立てて、「ほじし」(乾肉)にするため、

裂いた鱈を連ねて掛けている。棒鱈である。この物干しを真澄は「魚屋」(ナヤ)と呼ぶとしている。右端のほうに何も吊るされていない物干しがあるが、それをみると、枝分れや叉木になったところを利用して、数段の横竿を掛け渡しているのが知られる。真澄は5月9日、相沼近くの泊川にある苫屋形の杉浦某の家に泊ったが、ここも鱈漁で富み、家ごとに木を横たえて高く掛け渡し、鱈を乾していた(②44)。尾鰭をつたう五月雨の雫で生臭く濡れていると表現し、眠れなかったと書いているので、真澄はその臭いがとても嫌だったようだ。雨続きで、ここにしばらく滞在したが、鱈の釣船が、ゆげ、あかそいを餌につけ、200尋もの長い「つの」(餌の糸、釣の緒)を下ろして、かかるのを待つて釣るのだと聞いている(②52)。